

教育課題研究

児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方
(2018年度～2019年度)

研究のまとめ

(一年次)

2019年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目 次

ページ

学校長メッセージ

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究のゴールイメージ	1
IV	研究の仮説	1
V	研究の内容	2
VI	研究の組織	2
VII	研究の方法	2
VIII	研究の実際	
1	キャリア教育研究班	3～6
2	保健体育科研究班	7～14
3	小学部研究班	15
(1)	1年研究班	16～18
(2)	2年研究班	19～20
(3)	3・4年研究班	21～22
(4)	5年研究班	23～24
(5)	6年研究班	25～26
4	中学部Ⅰ課程研究班	27～33
5	中学部Ⅱ課程研究班	34
6	高等部Ⅰ課程研究班	35～36
7	高等部Ⅱ課程研究班	37
8	高等部Ⅲ課程研究班	38～53
9	高等部作業学習研究班	54
10	寄宿舎研究班	55
IX	研究のまとめと今後の展望	56～57

は じ め に

平成29年の特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領の告示に続き、平成31年2月に特別支援学校高等部学習指導要領が告示されました。今回の高等部の学習指導要領の改訂でも、小中学部と同じく知的障がい者のための各教科等の目標や内容について、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成すべき資質・能力の三つの柱に沿って詳しく記載されており、社会的・職業的自立に向けてキャリア教育の充実を図ることも規定されています。

本校に在籍している児童生徒は、知的障がいの程度や学習状況等には個人差が大きく、多様化する児童生徒の学びに対応するためには、各教科や自立活動の指導等の指導内容や方法について教職員の専門性を高め、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた授業の改善・充実を図ることが課題となっています。そして、多様な学びに対応できる授業実践力を高めるためには、新学習指導要領等の趣旨を踏まえた校内研修の充実と教職員同士が主体的に学び合うことが必要だと考えます。

そこで、今年度本校は、新学習指導要領で掲げられている「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の考え方を受け、「児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方」を研究主題とし、小学部、中学部、高等部、寄宿舎がそれぞれに児童生徒の実態や課題に応じて、学部・学年・寄宿舎、そして小・中・高等部を縦割りにした研究班を組織し日々の授業実践につながる2カ年の研究に取り組むこととしました。そして1年次の研究の成果を「研究のまとめ（一年次）」としてまとめました。この「研究のまとめ」を読んでいただいた皆様方からの御意見や御指導をいただき、さらに研究を進めていきたいと願っております。

最後に、本年度の校内研究をまとめることができましたことを本校の全教職員及び研究を進めるにあたって御協力をいただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

平成31年3月
みやざき中央支援学校
校 長 坂本 奈美

I 研究主題

『児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方』

II 主題設定の理由

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックの開催が契機となり、国内でも情報化やグローバル化が一気に進みそうな機運となっている。今日の社会情勢としては、情報化やグローバル化が、私たち人間の予測を超える加速で進み、身近なものの動き、生活の様式等が目まぐるしく変わる、いわゆる変化の激しい社会となっている。これらは複雑かつ予想困難であり、どのような職業、人生を選択するにかかわらず、すべての子どもたちの生き方に影響するものである。

今は、これまでも変化の激しい社会の中で育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直す好機にある。学校でこれまで培われてきた教育力をさらに発揮させ、子どもたち一人一人の可能性を引き出し、個々のキャリア発達を促し、社会の活力につなげていくことが強く求められる。

本校は昨年度まで、各学部の教育課程や具体的な教科指導等についての情報共有を図りながら学部間の連携や、新しい実践を取り入れた授業改善に取り組むために、『共に生きる力を育む「新しい指導と支援」』を主題として、課題に応じて各学部の職員を混成したチームを編制し研究に取り組んだ。この3ヶ年の研究で得られた成果としては、授業研究による授業改善はもちろん、学部間の情報交換により共通理解をはかることができ、学部を超えて授業や指導・支援の在り方について協議することで、課題解決を図ることができたことである。

また一方で、多様化する児童生徒へ対応するため、教育課程の検証、各教科等における教科指導、合わせた指導に関する内容の検証等、これまでの研究の成果をどのように日々の教育実践に生かしていくのか、課題もある。そして、昨年4月に告示された新学習指導要領への対応も急がれる。

そこで、今年度は研究主題を『児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方』と設定し、研究を進めることとした。これまでの研究を通して培った、学部間の情報共有の視点を意識しながら、「主体的に学ぶ力」を育てるために、学習指導要領に基づき、どのような教育課程を編成し、それをどのように実践、評価、改善していくのかという「カリキュラム・マネジメント」を通じて、子どもたちにどのような資質・能力を育むのか、教育課程、年間指導計画、学習計画等を整理し、日々の教育実践につなげられるようにしたい。そのために、研究を通して新しい学習指導要領について理解を深め、育成を目指す資質・能力として3つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を意識した教育実践の積み重ねに取り組む必要がある。そして、日々の授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点で組み立てることで、「チームみや央」として学校の教育力の向上を図り、子どもたちの主体的に学ぶ力を培う指導・支援につなげたい。

III 研究のゴールイメージ

新学習指導要領について理解を深め、これまで本校が築いてきた研究や教育実践等をベースに、子どもたちが意欲をもって、さらには主体的に学習できる、新学習指導要領に対応した教育課程、指導計画の編成。

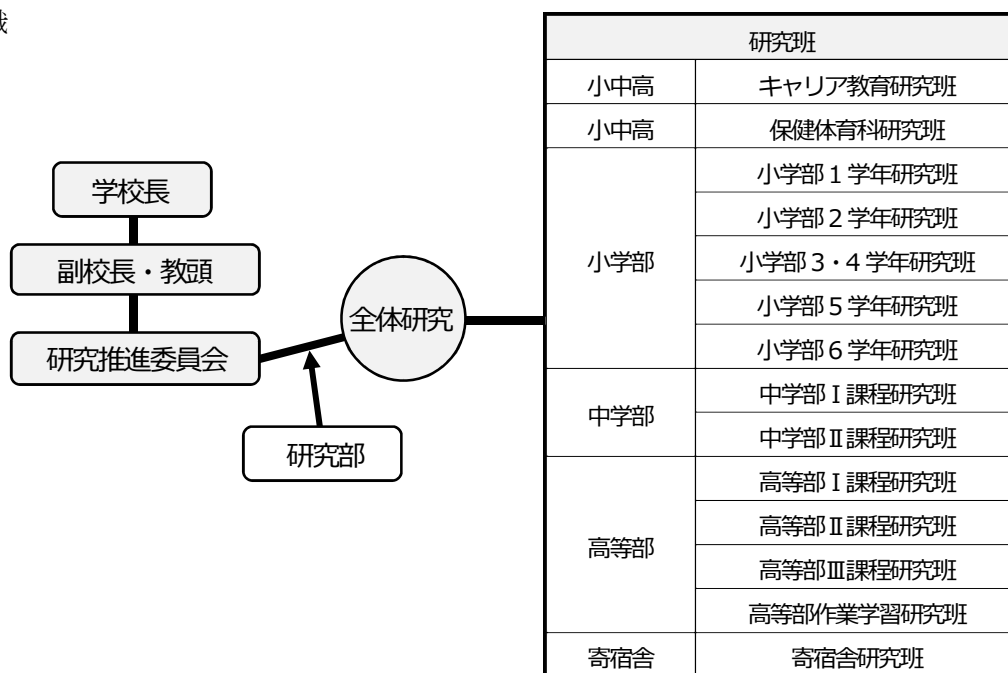
IV 研究の仮説

子どもたちのニーズや保護者の願いを基に、新学習指導要領について理解を深め、これまでに挙げられている課題を整理し、新学習指導要領に基づいた新しい学びの視点を取り入れた教育課程を編成したり、また指導計画を立案したりすれば、子どもたちが意欲的に取り組む学習活動が展開できるのではないかと。

V 研究の内容

新学習指導要領で指導・支援の視点として提示されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するための『主体的な学び』の部分に焦点をあて、学部の研究を中心として取り組んでいく。さらに学部を縦断した研究班も併せて編成し、キャリア教育等についても検証していく。本校がこれまでの研究で取り組んできた指導・支援について検証し、新学習指導要領に基づいて教育課程、指導計画等を見直し、指導・支援の方法について議論していく。

VI 研究の組織



VII 研究の方法

学校の組織を上記のような研究班に組織し、新しい学習指導要領を理解しながら、これまでの実践の検証、新たな試みを行っていく。各研究チームの協議等と連動しながら、全体研修として、研究に関連した「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」等の研修を実施する。

【運営】

研究班においては、課題を解決する具体的な指導・支援の内容について実践、及び検証授業の計画、実施、評価について取り組む。進捗や確認、了承については、9月後半に、各チームの報告や取り組みの報告、今後実践等の承認を得るための学部研究を設定。全職員に対しては、各チームの記録ファイルを開覧できる状態にし、共有する。

授業研究については、各チーム単位を中心に行う。研究授業の実施にあたっては、職員朝会等を活用して事前に連絡をし、できるだけ多くの職員で研修（参観）できるよう、運営委員会等で関係の職員に協力を依頼する。

【共有・評価】

各チームの実践については、2月に予定されている全体報告会（2ヵ年計画の1年次、中間報告という扱い）で行う。報告会は全研究班、プレゼン形式で行う。報告会終了後にアンケート調査を実施。本テーマのまとめを集約し、次の研究に活かせる形にする。

分類	段階 項目	【小学部段階相当】 職業及び生活に関わる基礎的な力を獲得する時期において育てたい力				【中学部段階相当】職業及び生活に関わる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期において育てたい力			【高等部段階相当】職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適応するための能力獲得の時期において育てたい力		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人間関係・社会形成能力	情緒の安定	情緒が安定することがある。	個に応じた支援があれば、活動できる。	個に応じた支援があれば、安定して活動することができる。	同じ環境であれば、活動できる。	変化があっても概ね安定して活動できる。	変化があっても安定して活動できる。	支援を受けて自分で情緒の安定を調節しようことができる。	自分で情緒の安定を調節しようことができる。	自分で情緒の安定を概ね調節しようことができる。	常に情緒は安定しており、落ち着いて作業に取り組む。
	挨拶・応答	他者を見ることがある。	促されて本人なりの表現手段で挨拶・応答ができる時がある。 発語に限らない	促されて本人なりの表現手段で挨拶・応答ができる。	自ら本人なりの表現手段で挨拶・応答ができる。	自ら挨拶・応答ができる。	状況に応じた挨拶・応答ができる時がある。	状況に応じた挨拶・応答ができる。 発語を伴う	誰にでも自ら挨拶ができる。	状況に応じた(声の大きさ・視線等も含む)挨拶・応答ができる。	相手や場に応じた言葉遣いができる。
	協調性	他者との協調が難しい。	時々他者と同じ場所を共有することができる。	一定時間、同じ場所を共有できる。	他者と同じ場所を継続して共有できる。 身近な他者	特定の人であれば協調できる。	生徒同士で協調できる。	概ね他者と協調できる。	普段関わりのない他者と概ね協調できる。	普段関わりのない他者と協調できる。	どのような場合でも他者と協調できる。
自己理解・自己管理能力	体力	ない	少しある	平均	平均以上	とてもある	労働体力が備わっている。				
	体調管理	難しい	支援があればできる	支援なしで自らできる							
	清潔・身だしなみ	衛生面を意識することが難しい。	清潔・不潔の違いが概ね分かる。	清潔・不潔の違いが分かる。	清潔な状態を保とうとする。	清潔な状態を継続できる。	身だしなみを整えようとする。	身だしなみを整えられる。	時と場に応じた身だしなみを整えようとする。 「清潔」を維持している前提	時と場に応じた身だしなみを自分で判断して整えられる。	時と場に応じた身だしなみを自分で判断して整え、継続できる。
	排泄	①意思	①促されてもトイレでの排泄が難しい。	①促されるとトイレで排泄する。	①自ら排泄の意思を示す。	①排泄したい時に自分でトイレに行ける。	①報告(言葉・身体表現)してからトイレに行ける。	①場・時間に応じてトイレに行ける。			
		②介助	②要全面介助	②要部分介助	②介助は必要ないが失敗することがある。	②介助は必要ないが見守り。	②完全自立				
	手指の巧緻性(手と目の協応)	意識してものをつかむことが難しい。	大きなものを握ったり、紙を破いたりできる。	小さなものを指先でつまむことができる。	ピース紐通し等仕組みの簡単な活動ができる。	チャックやボタンの操作が概ねできる。	チャックやボタンの操作ができる。	力加減を調節しながら丁寧に作業できる。	あまり質が高くないが、作業量が多い。	量は多くないが、質の高い作業ができる。	量・質ともに高い作業ができる。
	準備・片付け	模倣が難しい。	模倣ができる。	本人に合う支援があれば、簡単な準備・片付けができる。	簡単な言葉かけのみで、準備・片付けができる。	慣れた環境であれば、一人で準備・片付けができる。	自ら簡単な準備・片付けができる。	自ら準備・片付けに取り組むことができる。	道具・材料の準備・片づけ・管理を概ね行える。	道具・材料の準備・片づけ・管理を正確に行える。	道具・材料の準備・片づけ・管理を安全かつ正確に行える。
集中力	集中することが難しい。	好意的な事物・事象であれば、短時間集中できる。 ()分	好意的な事物・事象を混ぜながら、決められた活動を短時間集中して行える。 ()分	好意的な事物・事象がなくても、決められた活動を短時間集中して行える。 ()分	個別の支援があれば、決められた活動を一定時間集中して行える。	一斉授業での支援があれば、決められた活動を一定時間集中して行える。	支援がなくても決められた活動を一定時間集中して行える。	環境が変わっても、決められた活動を一定時間概ね集中して行える。	環境が変わっても、決められた活動を一定時間集中して行える。	どのような環境でも、決められた活動を一定時間集中して行える。	
持続力	持続することが難しい。	短時間であれば、活動場所で過ごすことができる。 ()分	短時間であれば、活動場所で、決められた活動を概ね行える。 ()分	短時間であれば、活動場所で、決められた活動を行える。 ()分	個別の支援があれば、決められた活動を一定時間継続して行える。	一斉授業での支援があれば、決められた活動を一定時間継続して行える。	支援がなくても決められた活動を一定時間継続して行える。	環境が変わっても、決められた時間、概ね継続して作業できる。	環境が変わっても、決められた時間、継続して作業できる。	どのような環境でも、決められた時間、継続して作業できる。	
課題解決能力	指示理解「聞く」	聞くことが難しい。	注意をむけて聞くことができる。	支援があれば、簡単な口頭指示を理解できる。	簡単な口頭指示を概ね理解できる。	簡単な口頭指示を理解できる。	簡単な口頭指示を正確に理解し確認できる。	支援があれば複数の口頭指示を理解できる。	複数の口頭指示を概ね理解できる。	複数の口頭指示を理解できる。	複数の口頭指示を正確に理解し、確認できる。
	指示理解「読む」	見ることが難しい。	注意をむけて見ることが難しい。	マークや記号の意味が分かる。	文字表記(ひらがな・カタカナ)がわかる。	単語を読むことができる。	支援があれば短い文を読み取ることができる。	短い文を読み取ることができる。	支援があれば指示文を概ね読み取ることができる。	指示文を概ね読み取ることができる。	指示文を正確に読み取ることができる。
	正確性	正確な活動は難しい。	支援があれば、正確さを意識して活動できる。	支援があれば、簡単な活動に正確に取り組める。	自ら簡単な活動に正確に取り組める。	支援があれば、概ね正確に作業を行える。	支援があれば正確に作業を行える。	概ね正確に作業を行える。	支援があれば間違いに気づき、修正して正確に作業できる。	自分で間違いに気づき、支援があれば修正して正確に作業できる。	間違いに気づくことと修正が自分ででき、正確に作業できる。
	報告	表現が難しい。	支援があれば、本人なりの表現手段で報告できる。 発語に限らない	本人なりの表現手段で自ら報告しようとする。	本人なりの表現手段で自ら報告できる。	必要な内容を概ね報告することができる。	必要な内容を報告することができる。	定時に決まった文言で報告できる。 発語を伴う	定時に的確に報告できる。	必要時と判断し、決まった文言で報告できる。	必要時と判断し、的確に報告できる。

課題解決能力	質問・解決力	表現が難しい。	支援があれば本人なりの表現手段で依頼や訴えができる。	困った時、わからない時に、本人なりの表現手段で依頼や訴えをしようことができる。	困った時、わからない時に、本人なりの表現手段で依頼や訴えが概ねできる。	困った時、わからない時に、必要な内容を概ね含んだ依頼や訴えができる。	困った時、わからない時に、複数の選択肢から解決方法を選ぶことができる。	困った時、わからない時に自分で解決しようことができる。	支援があれば、必要時に質問し、解決できる。	必要時に質問し、解決できる。	必要時に的確に質問し、解決できる。
	用具の取り扱い	用具の使用が難しい。	支援があれば、用具を使用できる。	支援なしで用具を使用できる。	支援があれば用具を正しく使用できる。	自ら用具を正しく使用できる。	用具の基本的な使用方法を理解している。	安全を意識して用具を使用しようことができる。	用具を丁寧に扱い、正しく使うことができる。	用具を正しく扱い、簡単な手入れをすることができる。	用具を丁寧に扱い、安全に正しく使うことができる。
	作業能率	自ら時間・正確性を意識することが難しい。	支援があれば、時間・正確性に意識を向けることができる。	活動内容に関する基本的な動きを組み合わせることができる。	時間・正確性を意識して活動に取り組むことができる。	時間・正確性を意識して作業を遂行しようとする意識がある。	決められた時間内に作業を完了しようとする意識がある。	支援があれば、決められた時間内に作業を完了することができる。	進行状況(質・量)を自ら把握することができる。	進行状況(質・量)を確認し、決められた時間内に作業を完了することができる。	効率のよい方法を自ら考え、決められた時間内に作業を完了することができる。
キャリアプランニング能力	時間の認識	時間を意識することが難しい。	支援があれば、時間に意識を傾ける。	タイマーなどで時間を意識することができる。	タイマーなどで時間を意識し、時間を守ろうとする。	言葉かけにより時間を守ることができる。	言葉かけにより、自分で時計を確認して行動できる。	自ら時計を見て行動しようことができる。	時計を見て、自分で行動する。	時計を見て、見通しをもち行動する。	状況に応じて時計を見て、見通しをもち行動する。
	約束・規則	約束事の意味を理解することが難しい。	支援があれば、約束事の意味を理解できる。	約束事の意味を自ら理解できる。	物事には規則があり、守る必要があることを理解できる。	言葉かけにより決められた場面で約束・規則を守ろうとできる。	言葉かけにより決められた場面で約束・規則を守ることができる。	決められた場面で自ら約束・規則を守ろうとできる。	決められた場面で自ら約束・規則を守ることができる。	状況が変化しても約束・規則を概ね守ることができる。	状況が変化しても約束・規則を必ず守ることができる。
	作業態度	教師が気持ちを察しなければならない。	活動への取組は難しいが、快・不快を示せる。	活動への取組の有無が体調や気分によって左右される。	支援があれば、体調・気分不良を訴えても活動に取り組める。	体調・気分不良を訴えても、活動に自ら取り組める。	修正等の指摘を受け入れるのが難しい場合がある。	支援があれば、修正等の指摘を受け入れられる。	決められた場面で素直に指示を受け入れて作業ができる。	どんな場面でも素直に指示を受け入れて、徐々に作業に反映できる。	どんな場面でも素直に指示を受け入れてすぐ作業に反映できる。
	作業意欲	活動への取り組みが難しい。	支援があれば、活動に取り組もうとできる。	支援があれば、活動に取り組める。	自ら活動に取り組める。	支援があれば、与えられた課題に取り組もうとできる。	支援があれば、与えられた課題に取り組める。	自ら与えられた作業に取り組める。	自分のすべき作業を把握し、進んで取り組める。	前回の取組を踏まえて目標を設定して作業に取り組める。	必要時の工夫を自分で考えて進んで取り組める。
	責任感	活動への取り組みが難しい。	好きな活動であれば取り組める。	自分と他者との役割の違いを理解できる。	自分と他者との役割の違いを知り、自分の役割だと自覚することができる。	支援があれば、自分の役割に部分的に取り組める。	自ら自分の役割に部分的に取り組める。	支援があれば最後まで自分の役割に取り組める。	全体の中での自分の役割を把握し、支援があれば果たせる。	全体の中での自分の役割を把握し、必要時に周囲に支援を求めて果たせる。	全体の中での自分の役割を把握し、準備から終了時の点検までを確実に果たせる。
	TPO・振る舞い	TPOを理解することが難しい。	TPOのうち、1つの概念を理解できる。	TPOのうち、2つの概念を理解できる。	TPOのうち、3つの概念を理解できる。	支援があれば、TPOに応じて行動や服装、マナーや言葉遣いを使い分けられる。	TPOに応じて行動や服装、マナーや言葉遣いを概ね使い分けられる。	TPOに応じて行動や服装、マナーや言葉遣いを使い分けられる。	TPOに応じて行動や服装、マナーや言葉遣いを使い分けられ、継続できる。		
	スケジュール管理	見通しを持つことが難しい。	支援があれば、短時間の見通しが持てる。()分	支援があれば、一定時間の活動全体の見通しが持てる。	支援があれば、1日の見通しが持てる。	1日の計画表を見て、計画通りに行動できる。	1週間の計画表を見て、計画通りに行動できる。	一ヶ月の計画を把握し、予測しながら行動できる。	変更点があれば、順序を入れ替えて行動できる。	自分で計画を立て、概ね遂行できる。	自分で計画を立て、確実に遂行できる。
	金銭の取り扱い	お金の概念が難しい。	お金との交換で買い物をするのが分かる。	支援者と一緒に事前に予定を立てて買い物ができる。	支援者から助言を受けながら、店舗で買う物を決めることができる。	金種を理解し、合計金額通りに自分で用意できる。	決められた予算内で買い物をすることができる。	自分で予算を決め、買う物の情報を得て、使い方を計画できる。	収支を記録し、自分で金銭管理ができる。	金銭のやり取りの基本的なマナーを理解できる。(おごり・たかり・貸し借り)	お金の大切さや貯金の仕組みを理解できる。
	メモ・日誌等の記録	記録が難しい。	教師と一緒に行う(写真、具体物添付)。	支援があれば、本人なりの手段で記入できる。	本人なりの手段で記入できる。	なぞり書きにて記入することができる。	板書を見ながら記入できる。	漢字や仮名を使って記入できる。	作業に必要な事項を記録できる。	作業に必要な事項を整理して記録できる。	作業の反省・改善点等も正確に記録し、次回に活用できる。

<特記事項> ●体力：「労働体力」は、気力・体力・持続力を含む。

●集中力、持続力、スケジュール管理：「短時間」は5～30分。()分には個人の実態を記入。「一定時間」は40分程度。

「決められた時間」はそれ以上も含む。

●報告、質問・解決力の「必要時」の例：自分の工程・作業が終わったとき、トラブルが生じたときなど。

●挨拶、応答、報告、質問・解決力：「本人なりの表現手段」は、表情や身振り・手振り等も含む。

●記録の例：記録②～④はメモの記述だけではなく、写真、録音も含む。

●金銭の取り扱い；電卓等を利用して良い。

VIII 研究の実際

1 キャリア教育研究班

「キャリア教育における一貫した指導を目指して」

ア 研究のねらい

小学部入学から高等部卒業までの一貫したキャリア教育を行うため、昨年度、それぞれの発達段階において育てたい力をキャリア教育の視点から整理・分類し、「キャリア教育に関する実態評価基準表」を作成した。本年度は、他校の研究や本校の過去の学級経営案などを検証し、この評価基準表を基に本校の児童生徒の実態把握の方法を検討する。

イ 研究の内容

本研究では、学校全体としてキャリア教育における一貫した指導を行うための方法として、昨年度の研究において作成された「キャリア教育に関する実態評価基準表」を活用することで、児童生徒の課題や目標が明確となり、主体的に学ぶ力を培う指導につなげることができるのではないかと仮説を立て、「キャリア教育に関する実態評価基準表」の良い点と課題点の検討を行い、その後、各学部に分かれて、各学部での活用方法について検討を行った。（下記参照）

「キャリア教育に関する実態評価基準表」に関する各学部の意見

小学部	中学部	高等部
【活用の方法】 <ul style="list-style-type: none">・個別の指導計画の作成・評価の参考資料として活用する。・児童生徒共通理解や実態説明会の参考資料として活用する。・個別のファイル（教育カルテ）に挟み、引き継ぎ資料として活用する。		
<ul style="list-style-type: none">・項目の検討が必要。・他の実態把握の資料との関連や小学部段階でのキャリア教育のとらえ方などを整理することが必要。・記入時期は検討が必要。	<p>※中学部では、本年度より活用している。</p> <ul style="list-style-type: none">・上記、活用の方法でよい。・作成は担任。必要に応じて副担任と相談。・記入時期は6月と12月。	<ul style="list-style-type: none">・作業学習実態表等、他の実態把握の資料との関連を整理することが必要。・作成は担任・副担任・作業担当が担当する。・記入時期は5月と10月。

ウ 成果と課題

(1) 成果

- ・ 「キャリア教育に関する実態評価基準表」やその活用方法について各学部の意見を収集することができた。
- ・ 各学部で実施するための課題が明らかとなり、キャリア教育の視点から小・中・高が同じスケールで実態把握していくことの必要性を職員全体で共通理解する必要があることがわかった。

- ・ 研究を進める上で、国立特別支援教育総合研究所などの資料からキャリア教育の概要について研修するとともに、小・中・高一貫した評価基準表について県内外の実践例などの情報を収集することができた。その結果、それぞれの学校の現状と課題に応じて、工夫しながらキャリア教育に関する取組を行っていることが分かった。

(2) 課題

- ・ キャリア教育に関する小・中・高の一貫した教育の必要性とその評価の方法について、全職員で共通理解を図る。
- ・ 実態把握に使われている資料を目的に応じて見直し、整理していく必要がある。
- ・ 「キャリア教育に関する実態評価基準表」の見直しや活用方法について、今後も検討する。

【参考文献】

- ・ 文部科学省（2018年3月）特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領
- ・ 文部科学省（2018年3月）特別支援学校教育要領・学習指導要領 総則編（幼稚部・小学部・中学部）
- ・ 国立特別支援教育総合研究所（2010）知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」
- ・ 平成30年度 宮崎県立みやざき中央支援学校 学校要覧
- ・ 平成29年度 宮崎県立宮崎県立みやざき中央支援学校 学級経営案
- ・ 宮崎県教育委員会 特別支援教育室（平成24年5月） 特別支援学校 キャリア教育ガイドブック
- ・ 宮崎大学教育学部附属小学校・中学校 特別支援学級（2017）平成29年度の研究紀要「発達段階に応じた体系的なキャリア教育の在り方～第3次～」
- ・ 「平成30年度 第52回九州地区特別支援教育研究連盟研究大会「宮崎大会」」第1分科会「生きる力を育む日常生活の指導」にて提案「高等部卒業後を見据えた日常生活の在り方～小・中・高での一貫した指導体制の構築を目指して～」発表資料
- ・ 宮崎県立きりしま支援学校小林分校「キャリア教育に関する実態・評価表」
- ・ 愛知県立佐織養護学校（2013）平成25年度 研究報告書
- ・ 北村博幸（2016）知的障害教育におけるキャリア教育の現状と課題について

2 保健体育科研究班

ア 研究のねらい

- 2019年宮崎県学校体育研究大会、2020年九州地区学校体育研究大会に向けた、体育科の研究。
- 研究主題に即した研究を進めて行く。

〈研究主題〉

「生涯にわたり仲間とともに主体的に運動やスポーツに親しむ資質や能力を育む体育・保健体育学習」
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

《特別支援教育研究部会主題》

「生涯にわたり仲間とともに運動やスポーツの楽しさを実感できる体育科・保健体育科学習の在り方」
～児童生徒の卒業後を見据えた体育授業の展開～

《研究内容》

- ① 「体づくり運動」の授業改善
- ② 「体づくり運動」の小・中・高の単元構造図の作成。
※評価を新しいものに替えていく。単元構造図の中に、新たな評価の観点の枠だけを組み込んでおき、国立研究所から評価基準等がでたら挿入する。
- ③ 「体づくり運動」の深い学びにつなげる「学習資料」の作成
・ 実践事例集（スキルアップテキスト）・動画集の作成・段階に応じた学習カードの作成
→ 新たな視点で、良い物をより良いものにしていく。

〈新学習指導要領改訂及び、学体研スケジュール〉

年	H29 (2017)	H30 (2018)	H31 (2019)	H32 (2020) 東京オリンピック	H33 (2021)	H34 (2022)
担当県		佐賀県	福岡県	宮崎県		
担当校	しろやま	るびなす	中央支援	中央支援		
小学部	周知・徹底	移行期間 教科書検定	採択・供給	全面実施 使用開始		
中学部	周知・徹底	移行期間	教科書検定	採択・供給	全面実施 使用開始	
高等部	改訂 30年・3月	周知・徹底	移行期間	教科書検定	採択・供給	年次進行～ 使用開始

2019年11月14日（木）→宮崎市体育館にて授業発表（高2）

11月15日（金）→みやざき中央支援学校にて授業発表（小・中）

日 時	内 容
7月（来年度）	空港・ホテル見学の後、市の体育館見学
9月12日（木）	校外学習を兼ねて市の体育館にて1時間の授業
10月11日（金）	特別支援事前研（小・中学部）※本校にて実施
10月29日（火）	全体事前研（高2）※宮崎市体育館にて実施
11月14日（木）	県学体研（公開授業・高2） *宮崎市体育館
11月15日（金）	県学体研（公開授業・小中） *本校体育館

2019年11月 日（ ）→九州学体研：宮崎市体育館にて授業発表（高3）

イ 今年度の研究の内容

- (1) 小・中・高の3つの学部で、研究授業の実施。 授業単元「体づくり運動」
つながりのある授業を目指し、教材（新聞紙の活用）や授業内容を統一して行った。
→学習指導案は、別紙
- (2) 健康セミナー
- (3) 長期休暇「やったぜカード」の作成
- (4) 卒業生へのアンケート

ウ 成果と課題

- 授業の組み立て方や構成を改めて考えさせられた。
- 小・中・高、3学部の授業研究・授業参観を行い、非常に参考になった。
- 手立てや教材・教具の工夫。系統性の工夫を生かした。
- 系統性、段階に応じた授業の組み立ての更なる工夫が必要。
- テーマに沿った研究発表。
- 学校全体で、いかに運動に親しませるかが課題である。（いかに続けさせるか。）

エ 今後の取り組み（2年次の研究に向けての方向性）

- (1) 年間計画の見直し、単元構造図や系統性の工夫。
- (2) 授業改善
- (3) 授業実践
- (4) 体づくり運動 DVD 動画集の作成

日 時 平成30年9月26日(水) 5校時

場 所 体育館

授業者 上村 紘史 (T1) 前田 悠介 (T2)

永山 文男 (T3) 太田 慶子 (T4)

杉尾 智恵 (T5) 嶋津 史 (T6)

森永 一浩 (T7) 井上 公道 (T8)

横山 敦子 (T9) 武田 幸一 (T10)

1 単元名 「体づくり運動」

2 単元の目標

- (1) 順番や決まりを守り仲良く運動をしたり、運動をする場の安全に気をつけたりして多様な動きをつくる運動に進んで取り組もうとする。【関心・意欲・態度】
- (2) 多様な動きをつくる運動の行い方を知り、よい動きを見つけたり運動を楽しむための活動や場を工夫したりしている。【思考・判断】
- (3) 体を移動する運動と力試しの運動を通して、体の基本的な動きを身につけることができる。【運動の技能】

3 運動の一般特性

本単元は、「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成され、自他の心と体に向きあって、体を動かす楽しさや心地良さを味わい、心と体をほぐしたり、体力を高めることができる領域である。体ほぐしの運動では、心と体の関係に気づき、体の調子を整え、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うことをねらいとしている。体力を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続させる能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせる運動を計画的に取り組むこととなっている。これらの運動を行うことは、これからも様々なスポーツを行っていく上での基礎・基本となる動きや態度が培われ、生涯を通じて健康で安全な生活を営むための能力を育てるためにも大切な単元である。また、動きの基礎的・基本的な内容に取り組むことで、自分のボディイメージやボディバランス等の向上や課題発見にも繋がる。そして、運動を通じて体がほぐれると心がほぐれたり、心がほぐれると体がほぐれたりする体験を通じて、自己の心と体と他者の心と体ともかかわり合え、コミュニケーション能力の向上にもなり、これからの運動や実生活にも必要な能力が培われるため、本単元に取り組むことは、大変意義深いと考える。

4 生徒の実態

本グループは、高等部1年生の通常学級30名、重複障がい学級7名、計37名(男子21名、女子14名)のグループである。主に知的障がいや肢体不自由のある生徒がおり、中には、

心臓疾患や不登校の生徒もおり配慮の必要な生徒も在籍している。本校中学部から入学してきた生徒が15名、近隣の特別支援学校中学部から入学してきた生徒が3名、地域の中学校特別支援学級から入学してきた生徒が19名おり、これまでの経験や学び、運動への興味関心などの実態差は、非常に大きい。

(1) 運動の特性に触れる楽しさの体験状況

本校1年生は、入学してから集団行動、短距離走、ダンス、水泳と学習してきた。運動に関するアンケートでは、「運動が好き」あるいは、「どちらかというが好き」と答えた生徒が87.9%で運動に対する関心の高い生徒が多い。「運動がきらい」あるいは、「大きらい」と答えた生徒は、12.1%だったが、その中には、「運動は、嫌いだがオリンピックやバレーボールの試合をTVで見ることは好き」という興味深い回答もあった。

(2) 知識、思考・判断に関する学習体験状況

1学期の後半から水泳の学習において、自己やチームの課題を見つけたり、提供された練習方法から自己の課題に応じた練習方法を選んだりしながら学習に取り組んでいる。しかし、知識と技能を効率よく関連させた学習ができていない。本単元では、学習ノートを活用し、毎時間の自己評価を行い、学習状況や技能のポイントを把握させながら、さらに学習課題の取り組み方を工夫できるようにしたい。

(3) 運動の習得状況

本学年の体力テストの結果は、障がいの程度や経験値の違いから実態差が大きい。また、心臓疾患やてんかん等で測定困難な生徒もいる。

(4) 生徒の運動に対する思いや願い

運動に親しみ、楽しいと実感できるように、簡易な課題から与え、達成できた時の喜びを実感できる学習を進めていきたい。目標を持って学習を進め、その目標が達成された時やチームで協力して学習を進める時に体育の学習が楽しいと感じている生徒が多い。また、チームで協力してプレイができるようになりたいと感じている生徒が多い。

5 学習を進めるに当たって

はじめの段階では、オリエンテーションにおいて、体づくり運動の一般特性や体の構造、オーバーロードの原則などの知識の共有化を図る。また、体づくり運動の習得状況を把握するために、小学校までの学びの振り返りの時間を設定する。全員体操は、前時とは異なる部位の体操を行い、家庭でも取り組めるよう全時間行う。

また、生活単元学習「自分を知る①」において「自分のからだ」の学習と関連させて進めていく。身長・体重・血液型・視力・平熱等、自分のからだを知り、知識を深めることは、大変意義深いと考える。

そこで、本時の授業にあたっては、自己やチームの課題を明確に持たせるために、チーム1台にタブレットを使用して、自分たちの動きを映像で視聴させて、考えさせる場を設定する。チーム内で話し合いを行い、主体的で深い学びへとつなげたい。

6 単元の評価基準

運動への関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・体づくり運動の学習に主体的に取り組もうとしている。 ・実生活に役立てることができるよう、体力などの違いに配慮しようとしている。 ・役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ・合意形成に貢献しようとしている。 ・互いに助け合い高め合おうとしている。 ・健康・安全を確保している。 	<ul style="list-style-type: none"> ①体ほぐしのねらいを踏まえて、自己の課題に応じた活動を選んでいる。 ②ねらいや自己の体力の程度に応じて強度、時間、回数、頻度を設定している。 ・自己の責任を果たす場面で、ねらいに応じた活動の仕方を見つけている。 ③仲間と学習する場面で、体力の違いに配慮した活動の仕方を見つけている。 ・実生活で継続しやすい運動例を選んでいる。 	/	<ul style="list-style-type: none"> ①運動を継続する意義について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ②運動を行う上で必要となる体の構造について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ③運動の原則があることについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。

7 指導計画（体づくり運動：全10時間）

回・日時	授業内容	運動種目
①9月 5日(木)3校時	オリエンテーション 中学部までの振り返り 自己分析 ・体力テストの結果 ・夏休み健康カレンダー 目標決め	①「体づくり運動」とは(理論) ②中学部までに行った内容を3～5種目発表させ、全員で取り組む。 ③自己分析 ・体力テストの結果 ・夏休み健康カレンダー ④目標決め
②9月11日(火)6校時	色々な体ほぐし(一人) 色々な体ほぐし(ペア) ※ゆったりと静的な動き	[一人]①つま先タッチ②ワイパー③足を開いて前・左・右④足の裏合わせ⑤腕伸ばし上・前・左・右⑥ブラブラ⑦太もも前伸ばし⑧アキレス腱 [二人]ペアストレッチ・キュウリの塩もみ
③9月12日(水)5校時	色々な体ほぐし(チーム) ※やや活動的な動き ※保健「心の健康」と関連づけ 変化について話合う	①指先テレパシー ②フラフープチェーン(2人組) ③デリバリーボール
④9月18日(火)6校時	「体力を高める運動」・理論を中心に ・体力テストの結果の比較 ※「数学」のグラフの読み取りと関連	①「体力を高める運動」とは(理論) ②運動計画について

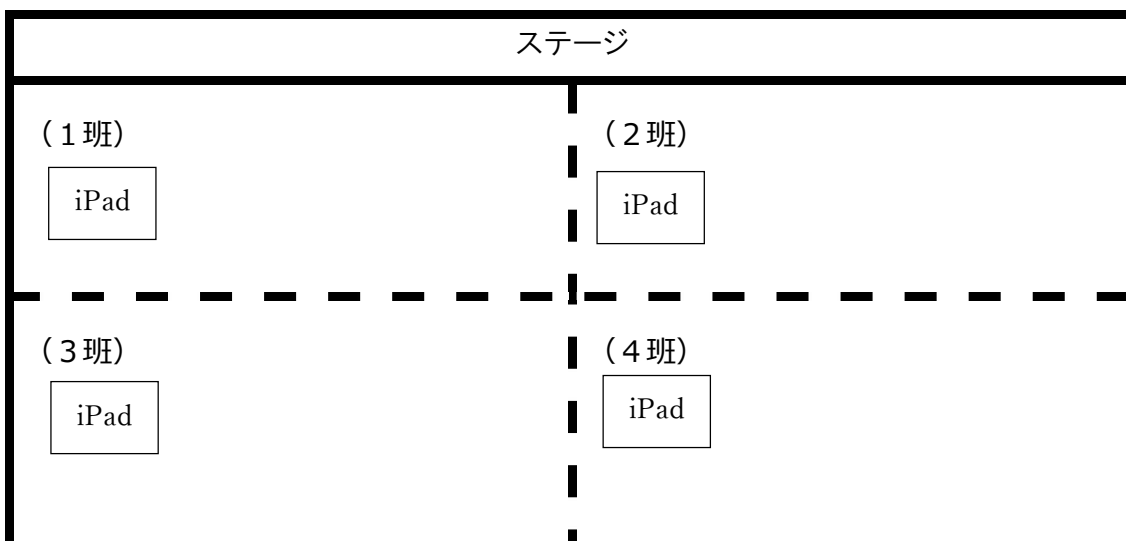
⑤9月19日(水)5校時	「力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動」①	・プッシュアップ ・腕立てジャンケン ・二人組で腕立て移動 ・おんぶ・おんぶ移動
⑥9月20日(木)3校時	「力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動」②	・サーキットトレーニング
⑦9月25日(火)6校時	「体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動」①	・2人組でストレッチ ・ラダー・ケンケンパ ・新聞棒バランス(2人)
⑧9月26日(水)5校時 (本時)	「体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動」②	・2人組でストレッチ ・新聞棒バランス(チームで) ・フラフープチェーン(チームで)
⑨9月27日(木)3校時	「家庭でできる運動種目」についてグループ毎に考えてみよう。 ※主体的・対話的	①グループ毎に5分間で行える運動について実践を踏まえて、工夫した点やポイントを考える。
⑩10月2日(火)6校時	「家庭でできる運動種目」についてグループ毎に発表してみよう。 ※主体的・対話的	①グループ毎に5分間で行える運動について実践を踏まえて、工夫した点やポイントを発表する。 ②まとめ ③「体づくり運動」の感想を記入する。

8 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・自己やチームの課題を意識して、練習やゲームに取り組むことができる。

(フラフープリレー)



(準備) iPad 4台 ・ フラフープ4本

指導過程

時間	学習内容及び活動	指導上の留意点	準備等
導入 13分	<p>1 ランニングを行う。(3分)</p> <p>2 ペアストレッチを行う。 ・集合したチーム毎に円になり、ペアでストレッチを行う。(4分)</p> <p>3 チーム毎に整列をする。</p> <p>4 はじめの挨拶をする。 ・T1の号令に合わせて整列・挨拶・礼をする。</p> <p>5 本時の内容を知る。</p>	<p>体育館に来た生徒から体育館をランニングさせる。 ・走るスピードが速い生徒は、外側を走らせ、歩く生徒は、コーンの内側を歩かせる。</p> <p>チーム毎に円になり、ペアでストレッチを行うように指示をする。(T1)</p> <p>○ペアストレッチ (各10秒間ずつ)</p> <p>①長座前倒 ②開脚前倒 ③開脚左倒 ④開脚右倒 ⑤左右体側 ⑥足体引きつけ</p> <p>・支持者は、ストレッチをする人の表情を伺いながら相手の気持ちになり考え、力を入れすぎさせないように伝える。 ・関節や筋肉の体のどの部分を解緊しているかをペアで話しをしながら気づかせる。 ・1種目20秒行い、6種目終わったら交代する。</p> <p>※本時の学習活動中 T2 以下は、担当チームや生徒について、健康や安全に配慮しながら一緒に活動し、動きができていない生徒に対して見本を見せたり助言をしたりしながら、生徒の実態に合わせて主体的な活動ができるよう個別の支援を行う。</p> <p>・しっかりと整列とかけ声をするよう促す。(T1) ・号令当番を指名し、号令をかけてもらう。 ・大きな声で「お願いします」と正面を向いて声を出させ、1・2・3で頭を下げるようかけ声をする。(T1)</p> <p>・本時の活動を簡単に口頭で説明する。(T1)</p> <p>〔本時のねらい〕 ・体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動に取り組み動きを高めよう」②巧みな動きを高める運動</p>	<p>コーン 4本 CD CD ラ ジカセ</p> <p>ホワイ トボ ード</p>
展開 25分	<p>6 「巧みな動きを高める運動」</p>	<p>○新聞棒バランス</p> <p>①新聞棒をどちらかの手の上に立ててペアの周りを1周歩く ②新聞棒キャッチ (ペアで)</p> <p>・努力を要する児童生徒への手立てとして、新聞棒の教材を工夫し、太くしたり短くしたりして、意欲が高まるようにする。</p>	<p>新聞棒</p>

		<p>○フラフープ人間知恵の輪</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各チーム円になり、手をつなぐ。1つのフラフープで手を離さずにチーム内で1周させる。 ①ルールのみ伝えて1度挑戦させる。 <p>どのような工夫すれば、スムーズに1周させることができるだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ②1度の挑戦を経て、どうすればスムーズにフラフープが1周できるか、チーム内で話し合い、ポイントを画用紙に書く。 ③練習の時間を設け、再チャレンジしてみる。 ④チーム毎に発表会をする。 ・T2は、iPadで様子を録画したりし、視覚的な手立てを促す。 ・(努力を要する生徒の手立て) 立位姿勢が難しい生徒は、椅子に座って行い、最初に渡す係とする。 	<p>フ ラ フ ー プ (4本) I Pad 画用紙 ペン</p>
<p>終末 7分</p>	<p>7 まとめを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①本時の良かった事をグループ内で話し合う。 ②各班の班長が良かったことを発表する。 <p>9 終わりの挨拶をする。</p> <p>10 片付けをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○グループ内で話し合いを行い、本時の良かったことを話し合う。 ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を身につけている。(行動についての思考・判断) ・良い行動には、全員で称賛を送る。 ・次回の授業内容を聞く。 ○号令に合わせて整列する。 ○終わりの挨拶をする。 ○全員で片付け、窓締めをする。 	<p>画用紙 ペン ・ 笛</p>

3 小学部研究班

(1) 研究主題 「児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方」

(2) 小学部研究班の研究

小学部で研究主題「児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方」を考えたときに、1年生から6年生という学年差が幅広いこと、その学年の中でも様々な実態差があることを考慮して、それぞれの学年として研究を進めていくことにした。

また、身に付けさせたい「児童の主体的に学ぶ力」を考えたときに、場面や教科、内容などを絞ることで、より具体的に児童に身に付けさせたい「主体的に学ぶ力」を想定できると考え、それぞれ学年ごとに取り組む場面や教科・内容などを検討し、実践することとした。

なお、学年ごとの研究のみではなく、小学部の普遍的な課題をテーマとした事例研究も小学部研究班全体で年2回行った。

(3) 研究の内容

小学部研究班（全体）(6/27 排泄について、8/20 摂食について)

- ① ケース提供者より（問題点等を5分程度で口頭にて発表）
- ② 参加者からの質問（5分）
- ③ ケースの指導法について、グループで話し合う（10分）
 - ・ グループ内で司会者、発表者を決める。
 - ・ ざっくばらんで構わないので全員の意見が出るように。
- ④ 発表（各グループごと）
- ⑤ ケース提供者の感想

テーマ	実態・課題	改善案
排泄	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校での排泄が全くない。 ・ 家ではおむつに排泄。 ・ トイレに座る、トイレの水を流すことはできる。 ・ 学校でおむつをつけても出ない ・ お茶～飲む ・ 汗～あまりかかない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家でおむつ、布パンツいろいろ試してもらう。 ・ 家庭の協力を仰ぐ。 ・ 家のトイレでできるようになったら学校でする。 ・ 自分で排泄物の処理をさせる。 ・ 家族や友達の排泄の様子を見せる。
摂食	<ul style="list-style-type: none"> ・ 偏食がありチャーハンかパンしか食べない。 ・ 給食では食べるものがあまりない。 ・ 野菜等つぶして肉に隠すと口に入れる。 ・ 食べ始めるまでに時間がかかる。 ・ 食感によっては吐き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食形態の工夫（刻む、つぶす、隠す） ・ ごほうび、食べたいと思わせる言葉かけ ・ 食べられるようになる時期の見極め ・ 給食嫌いにはなってほしくない ・ 家庭での調理方法に工夫してもらい、食べなくても食卓に並べる ・ 自分で調理したものを食べる経験 ・ 信頼関係

各学年の研究のまとめは、以下のとおりである。

(1) 小学部1学年研究班 「主体的に学ぶ生活単元学習の展開～苦手な物を自ら口に入れる意欲を高める指導を通して～」

ア 研究のねらい

1年生は、見ることや感触などの経験、児童同士や大人との信頼関係など、いろいろな面で未熟である。そして、学校生活では何をするのかを知る段階である。そのため、より計画的な生活単元学習の展開が必要である。また、主体的な学びを導き出すためには、興味・関心の高いことに着目することが効果的である。

今年度の1年生が共通して興味・関心をもっているのは「調理」であるが、給食などの自分の嗜好に関係なく提供された食事に関しては、ほとんどの児童に抵抗や拒否の姿勢が見られた。

これらの実態から、食事をテーマにした学習内容で児童の食事への抵抗を和らげ、自ら口にできる自信を培いながら、自分でやってみようという意欲を育む生活単元学習の展開のあり方を追究した。

イ 研究の内容

① 実態把握

10名の児童のうち、食べ物や調理器具などの写真や絵を見て名前や用途を答えられる児童は1、2名であった。また、個々の食事への抵抗の原因を把握したところ、経験不足による食わず嫌いと言障がいの特性による感覚過敏の2つに分かれた。

② 生活単元学習の展開

2つの原因についての慣れや緩和のために必要な経験として、感覚遊びや買い物、野菜作り、食材や調理器具などの名前を知る活動、いろいろな調理学習、校外での外食経験を挙げ、それらの内容を国語的要素、算数的要素、生活科的要素、体育的要素に振り分け再構成して単元展開をした。(資料1)

③ 手立てや工夫

粘土やスライムでの感触遊びで、見た目や感触の抵抗を和らげるようにした。また、食材をかうための買い物ごっこで意欲を高め、食材や調理器具などの名前当てや文字並べで言葉への関心を高められるようにした。調理学習では、本人の目の前で苦手なものを細かくして好きな食材と組み合わせたり、苦手な物を好きな味付けに組み合わせたりして食べられる安心感を味わわせるようにした。調理の回数を重ねるごとに食材を増やしたり大きさを変えたりして苦手なものを食べていることを実感できるようにした。

さらに、食事に関しては、何をどの程度食べるか児童と相談し、達成できるようもしくは達成できたことを確認できるよう視覚的な支援を講じた。苦手な物を食べられるか不安な児童には食べられるようになる手立てを求めやすいように絵カードを用いるよう促した。(資料2) 児童が「できた!」「食べられた!」と自信をもてる環境をつくり「(できて、食べられて)すごいね!」と達成感を共有できる信頼関係を築けるよう、学年での調理や給食で学級という枠を超え担任副担任以外の職員とも学習したり食べたりする機会を設けた。

家庭との連携のために、学校での取組について情報を提供し、家庭で取り組みやすい方法を提案した。

ウ 成果と課題

- 興味・関心のあることをテーマにした単元展開と、疑似体験だけでなく実際の体験を交えることで、調理そのものだけでなく食べ物や調理器具、さらには身の回りの物への興味・関心に広がり、意欲をもって学習に取り組む姿勢が顕著になってきた。
- 興味・関心のあること以外の学習活動でも、いろいろな職員から認められる喜びを味わい、活動意欲がより高められた。
- 食事に関しては、学習で扱った食材を調理や給食で目にするすることで、抵抗が和らぎ、親しみを感じて口に運ぶ姿も見られるようになった。また、食べられることでいろいろな職員から称賛を受け、自信につながってきた。
- 学校での取組や変容を保護者に伝えたことで、一緒に買い物に連れて行ったり調理をしたりしたという報告があった。
- 家庭では、日々の食卓で苦手な物を積極的に出すまでには到っていない。
- 食事に関しては、促し方によっては苦手意識が再燃したり逃避したりする場面もまだ見られる。培った自信が揺るがないよう、必要な称賛や「食べられる」という事実の確認と促しを継続する必要がある。

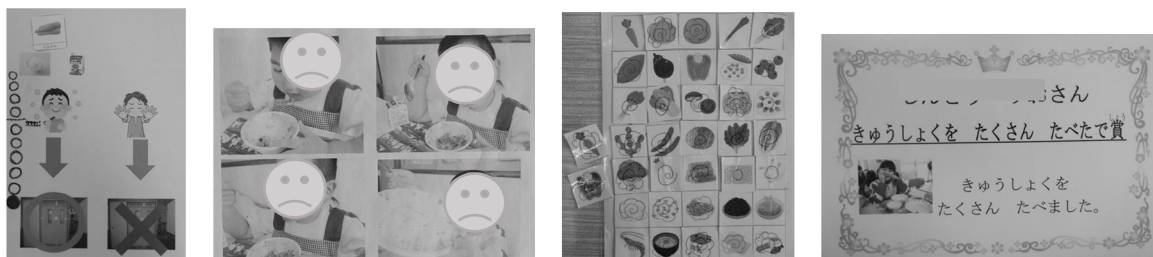
今年度の成果を踏まえ、次年度からは通常学級では国語や算数も始まることから、興味・関心のある「調理」をテーマにして各教科や領域を横断的に単元展開することで、より一層主体的な学びを導き出していきたい。

(資料1)

2 学期授業計画 (1-2)

月	ねらい	単元名	他教科との関連				評価
			国語的要素	算数的要素	生活科的要素	体育的要素	
8	・学校の学習での取組について共通理解を回り、家庭との連携につなげる	〈家庭で調理〉					○夏休みの宿題として、家庭の食事を8食分記録してくださった。調理で取り上げた物を作ってみた家庭もあった。
9	・いろいろな感触を味わわせ、自分の好きな感触、苦手な感触を知らせる ・知っている野菜の名前を増やす ・自分の口に入るものがお金を代償として得られることを理解させる ・買い物の基本の手順を知らせる	小麦粉粘土で遊ぼう 野菜スタンプ 買い物ごっこ にこにこクッキング④ (ピーマンパン) → すりおろし (多) 野菜を植えよう	読み聞かせ 野菜マッチング 道具マッチング 文字マッチング 記名 もの名前 形の認知 音節 繰返	大きい・小さい 多い・少ない 1対1対応 1～5の数概念 色弁別 色記名 全種弁別 買い物実務 はかりの使い方 きょう・きょう あしたの区別	手洗い・清潔 食事の大切さ 身の回りのきまり 学校周辺の散策 身の回りの安全 栽培 野菜の成長観察 秋の自然	楽しく歩く 手洗いがい	・スライムを作ったり粘土で丸めたりつぶしたりする活動を通して、「気持ち悪い」という感情が「やってみよう」という気持ちに変化した。 ・「にんじん」「ひーまん」「たまねぎ」「おにく」という食べ物の名前を言え、文字カードの並べ替えやマッチングができるようになった。 ・何か入っているか知った上であかりをした。→給食で離さなくても食べるように。
10	・買えた野菜を利用した調理に取り組みせ、食べてみようという意欲を高める	小麦粉粘土で遊ぼう スライムで遊ぼう 買い物ごっこ にこにこクッキング⑤ (人参ピザ、ピーマンピザ) → すりおろし (多) 校外学習 (近くの食堂)					

(資料2)



2～3種類の野菜から達成したら好きなことができる 食べた記録 食べられた野菜の記録 合同学習での表彰



完食できたら花丸

(表) 不安材料のイラスト

(裏) 解決方法のイラスト

2学期授業計画（1-2）

月	ねらい	単元名	他教科との関連				評価
			国語的要素	算数的要素	生活科的要素	体育的要素	
8	・学校の学習での取組について共通理解を回り、家庭との連携につなげる。	（家庭で調理）					○夏休みの宿題として、家庭の食事を3食分記録して下さった。調理で取り上げた物を作ってみた家庭もあった。
9	・いろいろな感触を味わわせ、自分の好きな感触、苦手な感触を知らせる。 ・知っている野菜の名前を増やす。 ・自分の口に入るものがお金を代価として得られることを理解させる。	小麦粉粘土で遊ぼう。 野菜スタンプ。 買い物ごっこ。 にこにこクッキング🍷（ピーマンパン） →すりおろし（多） 野菜を植えよう。	読み聞かせ。 野菜マッチング。 道具マッチング 文字マッチング 記名。 ものの名前。 形の認知。 音節。 縁遊び。	大きい・小さい。 多い・少ない。 1対1対応。 1～3の数概念。 色弁別。 色記名。 金種弁別。 買い物実務。 はかりの使い方。 きのう・きょう・あしたの区別。	手洗い・清潔。 食卓の大切さ。 身の回りのきまり。 学校周辺の散策。 身の回りの安全。 栽培。 野菜の成長観察。 秋の自然。	楽しく歩く。 手洗いうがい。	・スライムを作ったり粘土で丸めたりつぶしたりする活動を通して、「気持ち悪い」という感触が「やってみよう」という気持ちに変化した。 ・「にんじん」「びーまん」「たまねぎ」「おにぎり」という食べ物の名前を言え、文字カードの並べ替えやマッチングができるようになった。 ・何が入っているか知った上でおかわりをした。→給食で隠さなくても食べるように。
10	・買った野菜の手順を知らせる。 ・覚えた野菜を利用した調理に取り組ませ、食べてみようという意欲を高める。	小麦粉粘土で遊ぼう。 スライムで遊ぼう。 買い物ごっこ。 にこにこクッキング🍷（人参ピザ、ピーマンピザ） →すりおろし（多） 校外学習（近くの食堂）。					

(2) 小学部 2 学年研究班

ア 単元名 「みんななかよし 2 年生！！」

イ 単元設定の理由

小学部 2 年生は児童数が多く、学年全体での合同学習を行う機会を入学以来あまり多くもつことができなかった。そのため、クラスを超えた児童同士の関わり合いがほとんどなく、関わり方が分からないという状況であった。そこで、もっと同学年同士の関わり合いをもたせ、みや中央祭に臨んだり今後の学校生活を送らせたりしたいということからこの単元を設定した。

ウ 目標

- ・ 児童同士が主体的に同じ学年の友達と関わり合うことができる。
- ・ 教師と一緒にペアの友達と関わり、活動に参加することができる。

エ 研究の内容

題材名	内容	手立て
夏休みの思い出	夏休み中に他の友達がどのように過ごしたかを知る。	みや中央祭に向けて、2 学期は 2 年生全員で一緒に学習する機会が多くなることを予告し見通しをもたせる。
みや中央祭事前学習	みや中央祭に向けて、2 年生全員で学習することを知る。	
ペアで遊ぼう	くじ引きでペアを決め、本時はそのペアと一緒にわらべ歌遊び、おにぎりリレーを行う。	1・2 組と 3・4・5 組の児童がそれぞれペアになるようにくじ引きをさせる。
できるかな製作	みや中央祭のペアと一緒にそれぞれの動物の製作を行う。	1 ペアにつき教師を約 1 名配置し支援を行う。
みや中央祭練習	ペアを固定し、みや中央祭へ向けての練習を重ねる。	それぞれのペアの関わり方を検討し、教員間で共通理解を図った上で支援を行う。
おたのしみ会	2 学期一緒に活動してきたペアの相手にカードを贈る。	

【実践の工夫点】

- 夏休みの思い出～ペアで遊ぼう（計 4 時間）⇒児童の活動の様子を実際に見て実態把握を行い、どのペアでみや中央祭に臨むか検討を行った。また、みや中央祭舞台上での順番や流れも慎重に検討を重ねた。
- 学習の流れを「約束」「合言葉」「活動」と固定することで、児童に活動の見通しも持たせた。そうすることで、児童は安心感をもって活動に参加することができ、より主体性をもって活動できる結果となった。
- みや中央祭の舞台上でめくる絵に関して、いかに児童の力だけで活動できるかを考え視覚支援、めくりやすさなどを熟考し教材研究を行い改善を重ねた。

オ 成果と課題

- クラスを超えての活動を今まで経験したことがなかったが、ペアの友達を意識することができるようになった。他の場面でペアの友達を見かけたときも嬉しそうな様子が見られた。
- 授業場面だけでなく、みや央タイム等でも一緒に遊ぶ機会を設けたところ、その後も主体的に一緒に遊ぼうと友達の教室を訪ねていく姿が見られるようになった。
- 教員同士でも児童のことについてよく話し合いをもつことができ児童理解を深め、学習内容と各児童の目標についても共通理解を図った上で支援することができた。
- 集団での活動が苦手だったが、みんなと同じようにバンダナを巻くことができたり友達の活動の様子を見ることで自分のすべきことが分かったりした児童もいた。
- 研究とみや央祭を重ねたことで細やかな計画案を早期から出すことができ、教員も見通しをもって準備することができた。児童の活動内容について検討を重ねることでシンプルでより児童にとって分かりやすい活動にすることができた。
- これからも関わり合いを続けられるような場面設定や学習計画を立てていく必要がある。

(3) 小学部3・4学年研究班

ア 単元名「たんじょうかいをしよう」

イ 目標

- ・ 誕生会のそれぞれの係の内容を知り、取り組んでみたい係を選ぶことができる。
- ・ 自分の係の役割を理解し、意欲的に会に参加することができる。

ウ 研究の実際

① 単元設定の理由

これまで合同学習を行う際、教師主体での授業が多く児童の自主的な活動が少なかった。特にI課程の児童は、自分の意思を伝える手段が確立しておらず、受け身での授業参加が目立った。しかし、中には自分の意見やアイデアを出して積極的に授業に関わろうとする児童や、合同学習の形態に慣れ、見通しが立ってきたり、授業内容に興味をもちだして楽しめるようになってきたりする児童も見られた。授業の中でどの児童も主体的に活動するために、どの学習形態で、どのような授業展開や工夫をしていくことがよいのかを話し合った。

そこで昨年度から取り組み、児童が楽しみにしている誕生会を取り上げ、児童が自ら意欲的に関わる授業づくりに取り組むこととした。

② 内容及び期間

期 間	内 容
7・8月	1学期の誕生会の反省、児童の活動の洗い出し、誕生会の計画、教材作り
9月	オリエンテーション（1回目の係決め）、9月の誕生会、誕生会反省
10月	10月の誕生会、オリエンテーション（2回目の係決め）
11・12月	11・12月誕生会、2学期の誕生会の反省
3学期	1月以降もオリエンテーション、誕生会を行い、次年度につなげる。

③ 手立てや工夫

・ 教材・教具

仕事への期待感や責任感を養うためにも、楽しい会にすることが必要と感じた。そこで、誕生者の座る椅子を豪華にし、「私も座りたい」というワクワク感を高めた。また役割を理解しやすくするためのワッペンや係によっては小道具などを準備した。司会者用支援グッズとして文字が読める児童には台詞カード、発語が未熟な児童についてはステップバイステップなどのVOCAの活用も考えた。

仕事の内容を理解するために、教師によるロールプレイングのビデオ、役割分担表などの視覚支援も行った。

・ オリエンテーション

誕生会の流れの確認や役割分担を行うための時間を設定した。オリエンテーションの中で役割の希望をとる時間を設け、自分の好きな仕事の場所に写真を貼って意思表示できるようにした。希望が重なってもお互いが納得できるように教師と共に話し合いを行った。

誕生会の役割を決めるためのオリエンテーションはその都度設定し、仕事の内容の確認

と役割分担を行った。

- ・ 役割分担

これまでは教師が役割を決めることが多かったが、自分のやりたい仕事を自分で決めることに挑戦した。児童に一人一役で仕事を準備し、仕事の役割と会の流れを理解するために、教師がロールプレイングを行い、その様子をビデオに撮って児童に見せることにした。また、仕事の内容を理解し、実践できるように2回続けて同じ仕事を行うことにした。

- ・ 場の設定

ワッペンの置き場所、係の立ち位置、道具の配置など、児童がスムーズに活動を行えるような場の設定を行った

- ・ 個々の児童への支援

各会の担当の係の児童に対して、児童が出来るだけ主体的に誕生会に取り組めるような支援を話し合い、教師間で共通理解し、授業に臨むようにした。

エ 成果と課題 (○は成果、●は課題)

- 自分が係の仕事をするということで、「たんじょうかい」を進めるには、どんな仕事があるか、どのような内容なのかを意識したり、知ったりすることができた。
- 自分たちで仕事をすることで、より一層「おめでとう」という誕生者に対する祝福の気持ちが強くなったり、誕生者を盛り上げようという意欲付けになったりした。
- 係を設けたことで、誕生会をより楽しみにしている様子が伺えた。
- 自発的に学習に取り組むことが少ない児童も、会場設営の係をすることで、集団の一員である自覚が芽生えたように思う。椅子運びや飾り付け、片付けを頑張って取り組むことができた。
- 回を重ねるたびに、係に対する理解が深まり、やりたい係を自分で決めるようになった。やりたい係を行うことで、会にも自発的に参加できるようになってきた。
- 今後も継続していくことで、より見通しがもてるようになり、自発的な活動がより見られるようになるのではないかな。
- 自信がなかったり、恥ずかしかったりして選べなかった係も、友達がしている姿を見て次回への希望や意欲につながった。
- ホワイトボードに絵を貼る活動が好きな児童は、会場設営の係を選び、生き生きと取り組むことができた。しかし、結果として同じ係を何度も選んでしまったので、新しい係にチャレンジさせたい。
- どの係も、誰でもできるように、さらなる工夫が必要だと思った。できる係が増えると、自分でやりたいという気持ちが出てくると感じる。
- やりたい係の希望が集中してしまった。係の振り分け方や決め方に工夫が必要である。
- プレゼントやゲームは、教師が用意しているが、児童に係を任せることはできないだろうか。学年を超えて、合同生単等でプレゼント制作をしたり、ゲームの準備をする等考えていけると良いのではないだろうか。
- 他の授業においても、受け身の授業にならないように、教材・教具、授業展開の工夫が大事になってくると感じた。

(4) 小学部5 学年研究班

ア 研究のねらい

学年での集団遊びを通して、子供に役割をもたせ、助け合い協力することのできる活動を設定することで、子供達の主体的な行動を引き出すことができるかどうかを検証する。

イ 研究の内容

① 主題

「子供同士で助け合い協力することのできる授業づくり」～学年での集団遊びを通して～

② 目指す児童像

- リーダーになる子供が友達を誘い、引っ張っていくことができる。
- 友達と一緒に活動することを楽しむことができる。
- 自分の役割を知り、意識して自分の仕事をするすることができる。

③ 研究の方法

- 毎週木曜日の5校時に以下に示すような合同学習を行った。

「わたして わたして シュート！」

チームで一列に並び、最後尾の人からボールを落とさないよう、友達に渡し、先頭の人でゴールを狙ってシュートする活動。シュート後、最後尾に移動し全員が順番にシュートしていく。2チームに分かれ対戦し、時間内に決めたシュート数で勝敗が決まる。

合同学習後は、学年会を実施し反省を行った。子ども同士の関わりや改善点などについて話し合い、次時の活動に生かすようにした。



ゲーム活動時のようす

○ 手立てと工夫

- ・ 友達を意識できるように、顔写真を常時掲示した。また、チームで話し合う場を設定し、並び順番や係、チームのリーダーやチーム名などを子供同士で考えることができるようにした。
- ・ ゲームをするチームと係の仕事をするチームに分かれ、それぞれの活動を子供達を中心となっていくことで、自分の役割を意識させ、活動に参加している充実感をもたせるようにした。
- ・ 前半は、メンバーを固定して対戦し、ゲームに慣れることや仲間意識を醸成できるようにした。
- ・ 後半は、毎時間チーム編成を行い、いろいろな友達と協力しあうことができるようにした。
- ・ 友達に声掛けするだけでなく、手を差し伸べるなどのサポートの仕方があることを伝え、どうすればみんなが楽しくゲームに参加できるかを考えるようにした。

ウ 成果と課題

- 同じ活動の積み重ねにより、ゲームの内容や係分担に見通しが立ち、声掛け等の支援が減ってきた。
- サポートの仕方を学び、相手を意識した働きかけが見られるようになった。
- 子供が行うサポートや友達への関わりは、職員が行うよりも、より自発的に進んで活動してきた。

- 友達を意識するようになり、自分からボールを渡すなど、できることが増えてきた。
- できること、知っていることを友達に伝えようとする姿が見られるようになった。
- 経験から「学び合い、伝え合う力」が身に付き、日常生活でも自然な関わりが見られるようになった。
- 教師をモデルにし、子供達に関わることができている。状況に応じて、自分にできる関わり方を自分で考えてくれるようになるとよい。また、教師が子供達への接し方を改めて考えていく必要がある。
- 子供達が、お世話をしているという感覚になることもあると思うが、同じ5年生の仲間として、手伝っているという意識がでてくると良い。

(5) 小学部6 学年研究班

ア 研究のねらい

「修学旅行」をテーマとし、修学旅行の事前・事後学習、修学旅行の内容を盛り込んだみや中央祭の練習等を通して、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方を考察する。

イ 研究の内容

まず6 学年担当職員で、児童にとって主体的・対話的で深い学びとはどういうものなのか話し合いの場をもった。その中で児童が自ら手を伸ばしたくなるような教材・教具がある中での学び（心が動く学び）、児童同士が意識し合ったり協力したりする学び、また友達同士で共感、共有する学びなどいくつかの考えをまとめることができた。

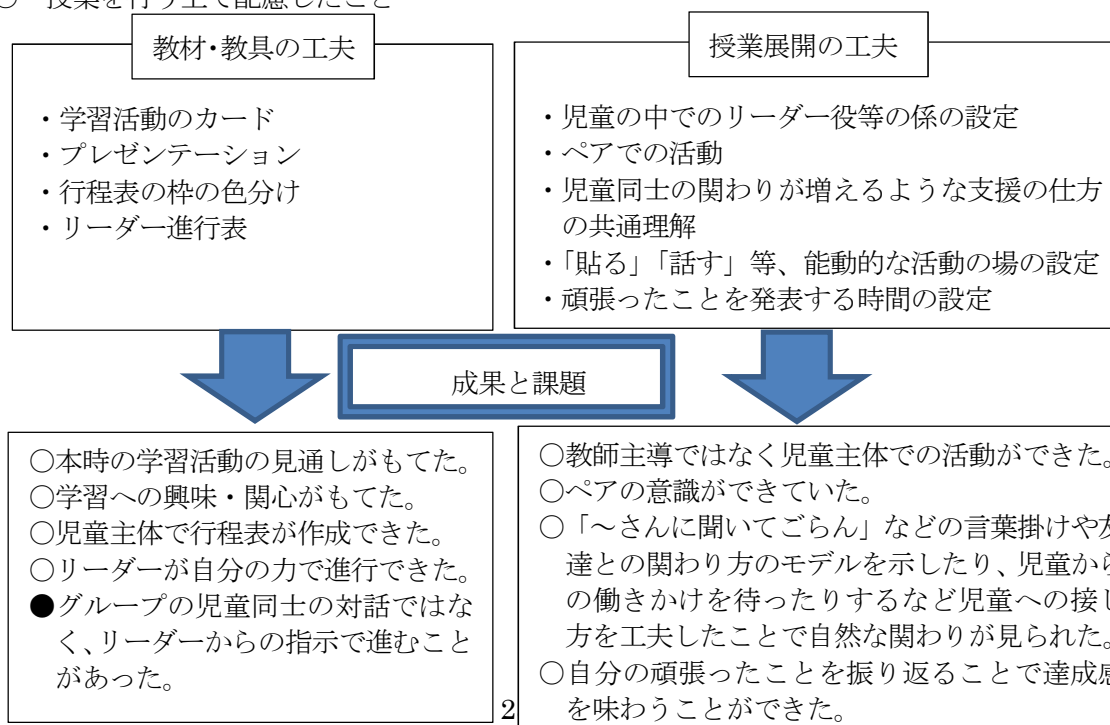
次に、児童の主体的・対話的で深い学びを実現させるために授業の中で工夫・配慮することを話し合い、修学旅行の事前学習（全部で7回、そのうち略案授業2回）を計画する上で次の点に配慮することを共通理解した。

- 児童が意欲的に取り組めるように、様々な活動内容を取り入れた学習の構成を目指す。
- 児童が興味・関心をもち、学習に参加したいと思うような教材・教具の工夫を目指す。
- 児童同士が自然に関わり合えるために、教師が支援の仕方を工夫する。

<修学旅行事前学習 略案授業1「おおまかな日程について」>

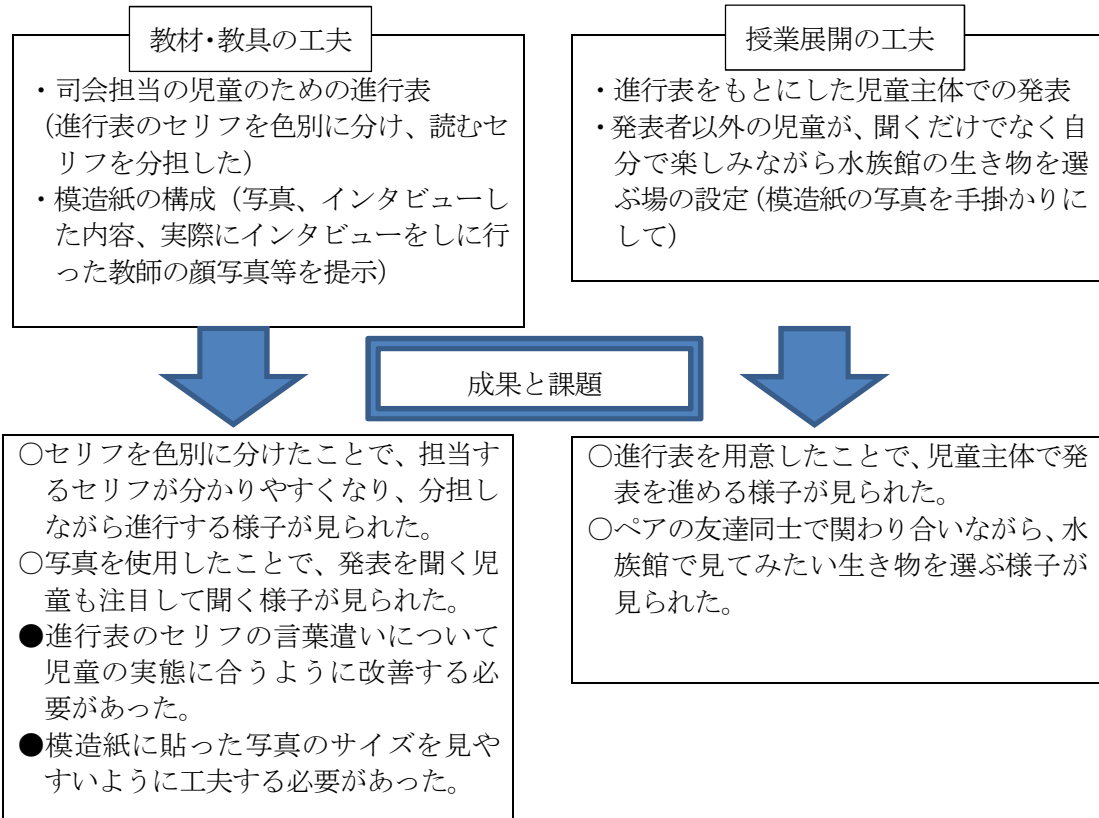
- 単元名「修学旅行にいこう」
- 目標
 - ・ 「いつ」「だれ」「どこに」修学旅行に行くのかを知ることができる。
 - ・ 修学旅行のおおまかな日程を知ることができる。
 - ・ 行程表を友達と協力して作ることができる。
 - ・ 自分達で作った行程表や、本時に頑張ったことを発表することができる。

○ 授業を行う上で配慮したこと



<修学旅行事前学習・略案授業2「調べ学習の発表」>

- 単元名「修学旅行に行こう」
- 目標
 - ・ 修学旅行で行く鹿児島について、これまでの調べ学習を通して分かったことを発表することができる。
 - ・ 個人の役割を果たしたり、友達と協力したりすることができる。



ウ 成果と課題

- 児童が学習を進行していくなどの場の設定や進行表などの児童が自分たちで進められるような教材・教具を工夫したことで、意欲的に安心して学習に取り組めた。
- 修学旅行の事前学習、みや央祭の練習、またその他の学習の中で同じ友達とのペア学習を継続して行ったことで、児童同士が相手のことを意識し合い、関わり合いながら活動に取り組めた。
- 隣の学級の友達に会いに行ったり、友達を気にかけてりするなどペアの意識が日常生活でも見られるようになった。
- 友達と一緒に前に出る、選ぶ、貼るという学習を行ったことで、I課程の児童が時間いっぱい生き生きとした表情で学習に参加する様子が見られた。
- 児童の思いをくみ取った主体的な活動を引き出すということが難しかった。
- 児童同士が関わる時に、教師が関わり方のモデルを示したり、声掛けの工夫をしたりすることで児童が望ましい関わり合い方を学ぶこともあるのではないかと（児童によっては過剰な関わりをする場合がある）。

4 中学部 I 課程研究班

「生徒の主体性を育む自立活動の指導・支援の在り方

～個別の指導計画に基づく PDCA サイクルを通して～」

ア 研究のねらい

自立活動の指導は、個別の指導計画を作成し、それに基づいて指導を展開しなければならない。また、個別の指導計画に基づく指導は、計画 (Plan) -実践 (Do) -評価 (Check) -改善 (Action) のサイクル (以下「PDCA サイクル」という。) で進められなければならないため、PDCA サイクルを確立しながら適切な指導を進めていくことが極めて重要になってくる。

本研究グループは、中学部の重複障がい学級の担当職員で構成されたグループである。重複障がい学級の教育課程において「自立活動の時間における指導」は、その多くを占めており、教育活動全体を通して行われる自立活動に加えて、「自立活動の時間における指導」も大変重要な授業であることが言える。それゆえ、指導の充実を図らなければならないことは必然的であり、私達教員の指導力も高めていかなければならない。

そこで、本研究では、「PDCA サイクルシート」を活用して、個別の指導計画に基づく PDCA サイクルを充実させながら授業実践・授業改善を行っていくことを大きなねらいとした。

イ 研究の内容

(1) 理論研究

- 新学習指導要領解説や参考資料等を読みながら自立活動の目標や指導内容及び指導上の留意点等についての理解を深めていった。

(2) 個別の指導計画の前期目標評価の実施

(3) 自立活動についての動画視聴研修及び本校全体研修会における「自立活動」についての講義

- 独立行政法人職員支援機構が配信している新学習指導要領「自立活動」の解説動画を視聴した。また、本校職員研修の一環で宮崎県教育研修センターの指導主事を招聘しての研修会において「自立活動」に関する講義を受講し、個別の指導計画作成のポイント等について確認した。

(4) 各学級の対象生徒について、新学習指導要領解説 (P28) に則った「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」の作成及び個別の指導計画後期目標設定

- 各学級から 1 名の対象生徒を抽出して事例研究を行うことにし、その生徒についての「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」についての図を作成した。

(5) 各学級対象生徒の個別の指導計画「自立活動」後期目標や具体的な指導内容の検討及び協議

- (3) の研修会等で個別の指導計画の長期及び短期目標の設定ポイントが示されたことを踏まえ、それらの観点から各学級対象生徒の目標等について職員間で検討・協議を行った。

(6) 授業実践

- 各学級で以下の手順に従って授業実践を行った。

- ① 授業計画
- ② 授業実践
- ③ PDCA サイクルシートへの記入と取組の整理
- ④ 授業改善
 - * 上記①～④を繰り返す
- ⑤ 各学級の実践の報告と意見交換

ウ 成果と課題

(1) 成果

新学習指導要領において「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」の例が新たに提示された。これを基に各学級の対象生徒について作成を試みた。新たに加わった項目も多く、作成には時間を要したが、実際に作成することで様々な観点から整理をすることができたり、実態把握から具体的な指導目標を設定するまでのプロセスを知ることができたりしたことは、有意義であった。

本研究の根幹であった PDCA サイクルを確立させ、適切な指導を進めていくために「PDCA サイクルシート」を活用した。このシートを活用することで、指導・支援の見直しや授業の改善に役立てることができた。授業を改善していくことで、生徒が主体的に自己の課題に向き合い、生き生きと学習活動に取り組めるようになってきたことも成果の一つと言えよう。

本校の指導教諭が行った「自立活動」の研究授業に本研究グループの職員も T2、T3 の指導者として授業に携わった。また、指導者以外の者は授業参観をした。そして、事後研究会にも参加し、個に応じた教材・教具の工夫や自立活動の捉え方、授業のポイントなど様々な助言をいただいた。そのことを学級での自立活動の授業に活かすことができたことも大変有益であった。

(2) 課題

今回の研究で、「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」の例が新たに提示され、作成を試みたが、初めて作成するものであり、不慣れなために多くの時間を費やした。作成の回数を重ねながら、要領よくまとめられるようにして時間短縮を図ると共に、指導実践につながる充実した内容の作成を目指していきたい。

今回の研究で「PDCA サイクルシート」を活用して授業改善を行い、一定の成果が見られたが、実施期間が短かったため、シートの更なる活用を目指していくことが課題の一つと言える。また、「PDCA サイクルシート」そのものについても項目や内容等の検証を行い、職員間で情報を共有できる物にしていくなど、改善も必要であろう。

来年度は、肢体不自由の生徒も中学部に在籍することになるため、ますます幅広い障がい種に対応していかなければならなくなる。よって、自立活動の指導を一層充実させていくためにも、引き続き、個別の指導計画に基づく PDCA サイクルを重視した授業実践を目指したシートの有効活用を継続していきたい。

自立活動 PDCA サイクルシート

中学部 (1) 年 (3) 組 性別 (男)

1 個別の指導計画作成に向けて 実態の把握 (別紙)

2 自立活動における PDCA

Plan 計画	題材名	あるいてげんきなからだをつくろう			
	授業形態	(個別指導) ・ 集団指導			
	本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見通しをもって、決められた5週を歩くことができる。 ・ 止まらずに、最後まで歩くことができる。 			
	本時の学習	指導内容	指導上の工夫 (指導方法、教材・教具など)		
		・ 歩行運動 (1棟と2棟の2階を5周)	場	1棟及び2棟2階	
			教材・教具	周回をマグネットでカウントするホワイトボード	
			手立て	本人の興味のあるイラストを貼ったマグネットを準備し、毎回本人に使用するマグネットを選ばせて意欲をもたせた。	
Do 実践	生徒の様子	毎回、「あるく」という学習内容を提示すると、自らマグネットを選び、廊下へ出ていくという自主的な姿が見られている。体調によっては、途中で座り込んだり、寝転んだりすることもあるが、調子がよいと、5周スムーズに歩き、一度も止まらずに歩くこともある。			
Check 評価	指導上の工夫	指導内容	適切		
		場	適切、工夫、発展が必要		
		教材・教具	改善が必要		
		手立て	改善が必要		
Action 改善	指導上の工夫	指導内容	適切		
		場	興味関心のある外、又は室内で場所を変える又は選択する		
		教材・教具	さらに興味のあるキャラクターマグネットを増やす		
		手立て	歩行をした周回が、何かにつながるような手立てを行い、意欲につなげる。例) 好きなトミカシールを貼っていく		
Plan 計画	実態把握のし直し (有・無)				
	目標の再設定 (有・無) → 次時の目標「 _____ 」				
	指導内容の再設定 (有・無)				
	時々座り込む意図を「体がきつい」「気持ちが向かない」など考えられるが、座り込む、寝転ぶという行動以外に発信する術を習得すべきでは、と別の課題を捉えているところである。自立活動の別の活動にて、自分の気持ちの語彙と、その表出方法の獲得を学習していく必要があると考え、この歩行活動場面での応用していくことが般化につながると考えられる。				

自立活動 PDCA サイクルシート

中学部（ 3 ）年（ 3 ）組 性別（ 女 ）

1 個別の指導計画作成に向けて 実態の把握 （別紙）

2 自立活動における PDCA

Plan 計画	題材名	個別の課題学習をしよう		
	授業形態	個別指導 ・ 集団指導		
	本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 20 分間集中して課題に取り組むことができる。 ・ 進んで体を動かすことができる。 ・ いろいろな教師と関る中で「失礼します」「お願いします」など明瞭に発音をし、相手に伝えることができる。 		
	本時の学習	指導内容	指導上の工夫（指導方法、教材・教具など）	
		①蝶結び ②三つ編み ③5 本ずつの割り箸の束作り ④先生に会いに行こう	場	必要な時以外は、教師は近付かないようする。
			教材・教具	①紐の色分けをする。 ③5 本ずつ束ねられるシートの活用。 ④いろいろな教師の写真の活用。
			手立て 教師の関わり	①②手を添えて一緒に行う。 ④いろいろな場所にいる教師を指名することで移動距離を増やしていく。
Do 実践	生徒の様子	②「右」「左」と声かけをすることで手の動きを覚えようとしているが、編み目が緩くなってしまう。 ④人と関わるのが好きなので、自分から教師が居る教室等に向かおうと意欲的であった。階段の昇降や走ることも苦ではなさそう。 ●「先生」と何度も呼んでは、「静かに」と教師が伝える場面が多い。		
Check 評価	指導上の工夫	指導内容	②改善が必要	
		場	適切	
		教材・教具	改善が必要	
		手立て	適切	
Action 改善	指導上の工夫	指導内容	②三つ編みの前段階として二つ編みにして、きつく結えるように練習をしていく。	
		場		
		教材・教具	「先生呼び出しカード」を3枚程度準備し、カードの数だけは「先生」と呼んでも良いようにする。	
		手立て		
Plan 計画	実態把握のし直し（有・無）			
	目標の再設定（有・無） → 次時の目標「 _____ 」			
	指導内容の再設定（有・無）			

中学部 3年 3組 自立活動学習指導案

日 時：平成30年11月9日（金）2校時

場 所：中学部3年3組教室

指導者：戸敷こずえ（T1） 橋本裕能武（T2）

1 題材名 「個別課題に取り組もう」

2 本時の学習

(1) 本時の目標

生徒 A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動内容を教師と相談しながら自分で決めて、それらに取り組むことができる。 ○ 気持ちを安定させながら取り組むことができる。
生徒 B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 決められた課題に取り組むことができる。 ○ 気持ちを安定させながら最後まで取り組むことができる。 ○ 言葉や身振りなどで教師に報告したり、援助を求めたりすることができる。
生徒 C	<ul style="list-style-type: none"> ○ 集中しながら課題に取り組むことができる。 ○ 進んで体を動かすことができる。 ○ 「失礼します。」「お願いします。」など言葉を相手に伝えながら、いろいろな教師との関わりを楽しむことができる。

(2) 指導過程

時間	学習活動及び内容	個人別学習活動及び教師の支援			資料準備
		A	B	C	
1分	1 はじまりのあいさつをする。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">姿勢を正し、号令に合わせて、教師の方を向いてあいさつをする。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・姿勢を正し、前方の教師に注目するように伝える。(T1) 		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">正座をして号令をかける。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・発する言葉をゆっくり、はっきりと言うように言葉掛けをする(T1) 	
3分	2 風船バレーをする。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">風船が飛んできたら教師や友達に打ち返す。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・まずは、T1が前方から生徒に風船を飛ばし、生徒一人一人と風船を介して言葉を掛けながらやりとりをしていく。 ・生徒が楽しめる活動を導入に行うことで、本時の学習への意欲を高められるようにする。 			・風船
3分	3 本時の学習内容を知る。 ・自分の課題学習について知る。 ・本時の目標を教師と一緒に確認する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">スケジュール表や課題ボックスの中身を見て確認する。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ課題ボックスの中身について具体物を提示しながら説明し活動内容の理解を促す。また、本時の目標も伝えていく。(T1) ・最後の「お楽しみ」の内容を選んでT1に伝えるようにする。 			・スケジュール表 ・個別課題の教材

34分	3 個別の課題に取り組む。	<p>課題内容や量を教師と相談して決めて、取り組む。</p> <p>・本児の体調等を考慮しながら、興味・関心に基づいた課題内容を提案していく。(T1)</p> <p>①コイン落とし ②塗り絵 ③写真を切ろう ④本を読もう 等</p> <p>・活動内容が決まったら、ホワイトボードに活動内容を書き、見通しがもてるようにする。</p> <p>・本人のペースで取り組ませるようにする。</p> <p>・途中で席を離れたくなったら、行き先を教師に伝えてから行くように伝える。(T1)</p>	<p>マッチング課題</p> <p>・本児が得意な課題からスタートし、学習への意欲がもてるようにする。</p> <p>ビーズ通し課題</p> <p>・最初は、苦手とする小さいビーズを提示してみる。拒否が強くなった時は、大きいビーズに変え、活動が継続できるようにする (T1)</p> <p>割り箸5本ずつの束作り課題</p> <p>・輪ゴムで縛る時に緩くなるので、きつく縛るように言葉掛けする。(T1)</p> <p>見付けて入れよう課題</p> <p>・本児が好きな虫に関する教材を用いた課題を提供し、集中が持続するようにする。</p> <p>お楽しみタイム</p>	<p>蝶結び練習課題</p> <p>・結び方が間違っていたら、手本を示したり、手を添えたりする。(T2)</p> <p>二つ編み課題</p> <p>・2本の紐をきつく結ぶように伝え、緩かったら再度チャレンジするようにする。(T2)</p> <p>縫い刺し課題</p> <p>・針を刺す場所が分かりやすいように印をつけておく。</p> <p>先生に会いに行こう!</p> <p>・本児の得意とする課題を最後の活動とすることで集中を持続できるようにする。</p> <p>・顔写真の教師の所に行き、シールを貼ってもらうように依頼する。</p> <p>・移動距離を長くしたり、階段等を使ったりするなど運動量を確保できるように工夫する。</p>	
3分	4 本時のまとめをする。				・評価カード
1分	5 おわりのあいさつをする。	<p>姿勢を正し、号令に合わせて、教師の方を向いてあいさつをする。</p> <p>・姿勢を正し、前方の教師に注目するように伝える。(T1)</p>		<p>正座をして号令をかける。</p> <p>・ゆっくり、はっきり言うように言葉掛けをする。(T1)</p>	

(3) 評価

評価の基準 (◎できた ○一部支援を受けてできた △できなかった)

氏名	評価の観点	評価	特記事項
A	<ul style="list-style-type: none">・ 活動内容を教師と相談しながら自分で決めて、それらに取り組むことができたか。・ 気持ちを安定させながら取り組むことができたか。		
B	<ul style="list-style-type: none">・ 決められた課題を教師と一緒に取り組むことができたか。・ 気持ちを安定させながら最後まで取り組むことができたか。・ 言葉や身振りなどで教師に報告したり、援助を求めたりすることができたか。		
C	<ul style="list-style-type: none">・ 集中しながら課題に取り組むことができたか。・ 進んで体を動かすことができたか。・ 「失礼します。」「お願いします。」など言葉を相手に伝えながら、いろいろな教師と関わることを楽しむことができたか。		

5 中学部Ⅱ課程研究班 「中学部Ⅱ課程の自立活動（時間における指導）はどうあればよいか。」

ア 研究のねらい

来年度より中学部Ⅱ課程の「自立活動（時間における指導）」が特設される。そのことを見据えて、情報の収集や実践事例を検討したりすることによって、中学部Ⅱ課程での自立活動のあり方・指導内容・指導計画等の検討を行う。また、授業研究を通して教師自身の実践力を育てることも目的にこの研究テーマを設定した。

この研究により、来年度以降の授業実践、さらに、本校中学部の教育課程全般の改善につながると考える。

イ 研究の内容

(1) 理論研究

新学習指導要領解説や参考資料から、自立活動の目標や指導内容及び指導上の留意点等について確認した。新学習指導要領「自立活動」の解説動画（独立行政法人職員支援機構配信）を視聴した。また、宮崎県教育センターの指導主事を招聘した本校職員研修において「自立活動」に関する講義を受講し、個別の指導計画作成のポイント等について再確認した。

(2) 情報収集

他校での実践事例の収集。また、本校他学部Ⅱ課程の実践についてアンケートを実施し、時間における指導の事例やメリット・デメリット・配慮事項等についてまとめた。

(3) 実態の把握・指導内容の設定

各学年の対象生徒について、新学習指導要領解説（p28）に沿って「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」を作成した。

学年ごとに、指導内容を検討し一覧を作成した。

(4) 授業実践

設定された目標を元に授業を計画し実施した。（4事例）PDCAサイクルにより事後研を実施した。

ウ 成果と課題

「自立活動」とは何か？から始まった研究であった。新学習指導要領解説の読み込みや資料の収集・アンケートの実施、さらに生徒の実態把握を経て指導内容を絞り込み、授業実践、PDCAサイクルによる事後研究。これらの一連の流れを進めることで「自立活動」とは何かと少しずつであるが見えてきたと感じる。来年度に向けての準備がようやく始まったところであると言えよう。

指導に当たっては、生徒の実態をしっかりと把握し、指導内容を絞り込むことが肝要であるが、今回の研究で新学習指導要領解説（p28）に沿って「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ」を作成したところ、多くの時間を費やすことになった。実態把握資料は、これ以外にもあり、生徒のカルテにはその多くが保存されている。教師自身の専門性を高め、実態を的確に把握することをスムーズに行えることがまず第一ではあるが、実態把握資料の一元化などの負担軽減も課題ではないかと考える。

来年度より月曜日の6時間目にⅡ課程の「自立活動」を設定し、実施することを学部に提案した。時間割上の設定については試行とし、より効果の望める時間帯を検討していきたい。また、指導グループや評価のあり方等を検討後、授業実践を進めていきたい。